

令和2年度 第1回釧路市総合教育会議

日時：令和2年8月7日（金）15：30～17：10

場所：防災庁舎5階 会議室A

構成員：蝦名市長、山口教育委員、松尾教育委員、種村教育委員、小出教育委員、岡部教育長

市側出席者：岡本総合政策部長、大坪学校教育部長、大山教育指導参事、津田生涯学習部長、齋藤福祉部長、高玉こども保健部長、高嶋学校教育部次長（教育支援課長）、江緑学校教育部次長（学校教育課長）、北澤学校教育部次長（北陽高等学校事務長）熊谷福祉部次長（障がい福祉課長）、三富こども保健部次長（こども育成課長）、熊谷産業振興部次長（商業労政課長）、藤田都市経営課長、及川総務課長（教育）、富田総括指導主事、森教育調整主幹、小西都市経営課長補佐、大島総務課長補佐（教育）、古屋主事（都市経営課）

関係資料：

【資料1】令和元年度 釧路市総合教育会議意見交換会意見への対応等

【資料2】切れ目のない教育を推進するためのロードマップ

【資料3】平成30年度釧路市総合教育会議意見交換会意見への対応等

【参考1】「北海道釧路商業高等学校OB・OGによる講話・交流会」について

【参考2】「北海道釧路北陽高等学校 釧路の企業人特別講座」について

【参考3】「障害者就業・生活支援センター」について

1. 開会

岡本総合政策部長）

- ・これより、令和2年度、第1回釧路市総合教育会議を開催する。

2. 市長挨拶

岡本総合政策部長）

- ・開催に当たりまして、蝦名市長に、冒頭御挨拶をお願いします。

蝦名市長）

- ・釧路市の教育大綱において、地域の中での教育力を上げていくということを掲げており、今まで、幼児教育から始まって、義務教育、大学という幅広い視野をもって、地域全体の教育力にどうするかをしっかりと考えていこうという形で、各関係者の方も参加していただき議論してきた。
- ・そこから、この地域の教育力の向上にどうやって落とし込んでいくのが鍵となっており、現場での取り組みをどう進めていくか、阿寒湖義務教育学校の開校を迎える中でどうやって進めていくか等々、具体的な議論から進めていきたい。
- ・リモート教育を含むGIGAスクール構想については、これはこれでしっかり進めていくことが必要。
- ・しかし、これを進めていくのは重要であるのと同時に、何か忘れているもの、取り残しているものは無いのだろうか、という考え方も必要。
- ・白か黒かというような二極化しただけの判断基準ではなく、中間にはグレーがある、重点はあるけれども、そこには濃淡があるということ認識して、その他にどういう影響もあるのかを考えていくことも重要であろうと考えている。

- ・そういう中で、この地域の教育力をあげていく、素晴らしい環境を作っていくことを目指して、会議を進めていきたいと考えているので、よろしく願います。

3. 議題

岡本総合政策部長)

- ・それでは、議事に移らせていただく。

(1) 令和元年度釧路市総合教育会議意見交換会のフォローアップについて

岡本総合政策部長)

- ・本日の議題の一つ目である「令和元年度釧路市総合教育会議意見交換会のフォローアップについて」説明させていただく。
- ・「成長の段階に応じた切れ目のない教育の取り組みについて」ということで、義務教育から高等学校教育機関等へのつなぎ等にかかる課題の把握、就職時の課題の把握などについて、高等学校、高等教育機関、経済分野等の関係者の方々からご意見をいただいたところ。
- ・本日時間の限りもありますことから、一つ一つの内容についての説明は省略させていただくが、いただいたご意見としては主に、義務教育と高校間、高校や高等教育機関と企業間の情報共有が非常に重要ということ、子どもたちの帰属意識の醸成が必要であること、また、『キャリア教育』という言葉の捉え方の相違があるのではないか、というようなご意見があった。
- ・頂いたご意見の中では、市へのご意見もあったことから、ご意見と市の対応状況等について、先に皆様にお送りしている「【資料1】令和元年度 釧路市総合教育会議意見交換会意見への対応等」にまとめている。
- ・これらの資料をご参考としながら、ご意見・ご質問等を頂戴したい。

岡部教育長)

- ・色々とキャリア教育について行っているが、市に戻ってくる子供たちを育てる重要さというのは、この意見交換会では、ご意見として随分と出されていたし、それが今の釧路のUIJの取り組み等にも反映されているのかと思う。
- ・令和元年度の意見交換会では思ってもみなかったが、この新型コロナウイルス感染症によって、国が唱え、様々な取り組みをしても実現できてこなかった地方創生の実現が叶う可能性があるのではないかと。
- ・義務教育も高等教育においても、このまちをどうしていくのかという志を持った子供たちが巣立っていくことが、これまで以上に出てくるのではと期待。

松尾教育委員)

- ・意見交換会の概要の資料について読ませていただいたが、小さい子供に対してキャリア教育というのが何を意味しているのかというところがある。
- ・やはり子供に夢を持たせるということが大事であると考えているが、将来を見据えてといっても小学校からは難しく、夢があって何かになりたい、というものがあってこそ、自分のやることに力が入るかと思う。その夢をもっと現実的なものに近づけるような取り組みが欲しい。
- ・野球の大谷翔平選手は、小さいころから努力してきたという話を知っているが、努力していくことが、実現につながると感じたところであり、お手本としてもっと知らしめるべきであり、中学生や高校生

のようなもう少し大きくなった子供たちには、現実的に、この先何年後の近い将来というものを見据えずに、漠然としたままキャリア教育というものをさせられても難しいかと思う。

- ・実際に就職されている方や、先ほど例として挙げた大谷選手等が行ってきた取り組みや苦労した話等を伝え、現実的に自分の近い将来を描けるような取り組みをしていただきたいと思うし、私達大人がそのために何かしていかなければならない。

蝦名市長)

- ・改めてキャリア教育という言葉の定義は、人によって捉えられ方が違うし、言葉の定義を整理していくことが必要だが大変。
- ・教育というものは何のために行っていくのか、と考えると、自分なりの定義の仕方というのは、その人その人の選択肢を増やす、ということで、夢や目標に向かっていくということもあるが、社会にでていくための選択肢を増やしていくことだと思う。
- ・時代によってなりたい職業が違い、昔では医者さんやケーキ屋、景気の悪いときには公務員、今はYouTuber となっており、子供たちの夢とか希望は時代背景によって変わってくるもの。
- ・現実の世界に入っていくときに、どんどん選択肢が狭まってきて、将来どうするかと直前になって考えると暗い雰囲気になっていく。
- ・逆に始めの時点やその中間時点で、子供が大きくなればなるほど子供の選択肢を増やすためには何が必要なのかということを考える必要がある、もちろん釧路市長という立場で言えば、地元に住いていただきたいという気持ちはあるものの、教育の目標としては、どこであろうとも子どもたちの選択肢を増やしていく取り組みをしていく必要がある、それがキャリア教育というものだと思う。
- ・小学校、中学校、高校というそれぞれの中で、子供のみならず親にもそういったことを伝えていく、情報を発信していく。特に親への情報発信というのは重要。
- ・ミスマッチという言葉も、自分に合っている・合っていない、というのは言葉の遊び。一定程度のスキルを持った人が、そのスキルを活かせないという場合に、ミスマッチということはあるが、スキルのない人にはミスマッチというものはないと思う。好きだ・嫌いだ、というものがミスマッチではない。世の中に自分のなりたい職業に就いている人が何割いるのかという、多分少ないと思うし、そういった現実を捉えないで、定義されていない言葉を用いながら議論をしていくことが問題。
- ・この総合教育会議では、共通の理念や考え方を合わせながら議論できれば良いと考えており、それが前回の意見交換会で経たときの感想。

山口教育委員)

- ・総合教育会議について、まず、意見交換会があり、そして、教育委員会だけではなく、市役所の様々な部署が参加し、関係機関に係る意見等については、今回の資料に記載されているようにフィードバックされていて、この総合教育会議がその場限りのものではなく、繋がりがあり、面として広がりつつあるなど実感しているので、総合教育会議は今後も確固たる形にしていてもらいたい。
- ・今回の資料にも示されているように、教育大綱やまちづくり基本構想について、やはり釧路の未来を託する子供たちに地域の魅力や産業への知識を高める取り組みを地域一体で進めていく。そのためには地場産品の活用による食育や職業体験が必要。そうして、子供たちが安心して学べる環境の確保に努めていきたい。こういった内容がまちづくり基本構想や教育大綱に盛られている。やはりキーワードは、人と人との関わりだと思います。
- ・今回のコロナ禍の問題があり、果たして本当に元の状態にもどれるのか。今までとは違った新たなやり方を求められているのではないかと、ということと同時に考えていく必要がある。
- ・商業労政課にて、今後は企業や商工会議所等と連携を図った取り組みを進めていくということを資料で取りまとめられているが、そういうプラスアルファの発想が必要。
- ・GIGA スクール構想でネット環境が各校整備される見通しが立てられており、今までのような直接に人と関わることのほかに、リモートでの繋がり方等も、このフォローアップにまとめられた内容に含め

ていただければ、さらに実効性のあるものになる。

種村教育委員)

- ・この総合教育会議を皮切りに、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、大学、そして就職として社会に出てからいかに連携していくかということで議論してきた。釧路で生まれて、小中高と卒業して、釧路に就職するという人も多いが、一番大事なことは社会に出て人間としてどう成長してくかということ。会社に出て初めて人間として成長してくのだと思う。やはり人と交わる中で成長するものだと思う。
- ・キャリア教育ということで、商工会議所と釧路にどういった企業について、「はたらく×くしろ」という取り組みが資料に書かれており、企業の紹介の冊子を作って小学校、中学校に配布しており、小さいころから釧路の企業としてどういったものがあるのかということを知り、改めて知る機会にもなるし、釧路の良さも知ることにもなるし、是非こういった民間の雑誌に色々と情報を出すことでアピールをしていくことが重要。
- ・先ほど岡部教育長が新型コロナウイルス感染症の話がされていたが、別に大都会に行く必要がなく、テレワークというシステムを用いれば釧路の中でも仕事ができるということを知り、どんどん情報発信していけばよく、実際そういう状況になりつつある。
- ・教育もオンライン教育というものは実際にやり始めている。そして生徒の満足度は結構高い。何故なら、今までは集団の中で先生が教えて集団で習っていくというものだった。ところが、いじめによって学校で学べない、或いは、自分独自で勉強したいという子供もいるし、皆の前であまり質問できないけれどもオンラインだったら自分だけなので質問できる、という状況が実際あることから、更にオンラインでの授業というのは検討していく価値がある。
- ・コロナ禍で色々と変わっていくことがあると思うが、むしろこれは地方のチャンスだと思う。大都会に行かなくても地方で十分に学んでいける、教育も受けられる、仕事もできる。さらに地方がどんどん盛り上がっていくのでは。

小出教育委員)

- ・前回の意見交換会では、キャリア教育というのは何なのだろうと考えながら参加させていただいて、その中でも色々と疑問を感じていたのだが、資料1に記載されているように、子供一人一人の成長と職業観というものを確立するための事業をやってもらいたい。
- ・市長から、人生の選択肢を増やすために、という言葉聞いたときに、1人の保護者として腑に落ちた。
- ・職業体験の受け入れ先の企業は、子供たちのために受け入れてくださっているということを感じられる。子供たちもそういうことを肌で感じながら職業体験することで、地域の中で育てられている、居場所がある、と感じられるという意味で良い取り組み。
- ・仕事を小さい時から知っていく必要があるかと思いながら前回は話を聞いていたが、実際に、高校生くらいになったときに、進学するにしろ就職するにしろ、どういう職業があるのかがわからなければ、その後の人生を選択できないということになる。何かになりたいという明確な目標があると、勉強をするにも目標となって前向きに取り組めるということもあるので、小さいころから職業を知ることが大事なことだと思う。
- ・地域の教育力というところでは、地域の方々に教育してもらっただけではなく、保護者も地域のことを知っておく必要があるということを知っている。地域の方々に様々なことをしていただいた中で、子供たちを育てているが、実際、そのことを実感していない、知らない保護者が沢山いるので、そこを知ってもらおうと保護者の地域に対する考え方等も変わってくる。そうなる子供たちの意識も変わってくる。それが帰属意識という言葉が当てはまるのかはわからないが、そういう雰囲気の中にいると子供たちも感じることもあり、それがこの地域に残って何かしようという意識にも繋がると思う。

岡本総合政策部長)

- ・種村教育委員、小出委員から、子供の小さい頃からの職業への意識、地域で育つことの意識という話が出ており、前回の意見交換会にては、北海道高等学校長協会釧路支部長の西堀先生から、新入社員が抱くイメージのミスマッチというもののご意見があった。それに対して市では、令和元年度事業であるが、釧路市立北陽高等学校並びに北海道釧路商業高等学校において、地元企業で活躍するOBがその2校を訪ねて、職場での経験について学生にお話しするという取り組みを行った。昨年度11月の意見交換会の時点では、まだ報告できる段階ではなかったが、本日、その概要について、「参考1」、「参考2」として資料としてお手元にお配りしている
- ・この中では、先輩として高校時代のことから、就職のこと、進学のこと、そして会社に入ってから経験、釧路で働く、生活する、というような個々のお話しを頂いたところです。ちなみに、北陽高校についての令和元年度ハローワークに提供の資料によると、卒業予定者236人のうち、就職希望者65人。また、商業高校での卒業予定者154人に対し、就職希望者89人と、いずれも地元就職したいという方々が、こういう場面を通じてお話しを聞けたということとなる。
- ・今までの意見を踏まえて改めてご意見があればいい。

山口教育委員)

- ・企業からも企業情報に関する資料を提供してもらっている。学校においても様々な職業体験ができるよう学校がお膳立てして、子供たちの職業感を育むということをしている。
- ・ネット環境が整備されて、1人1人の子供がパソコンやタブレットを持つとなる。それらも家庭でのインターネット整備の問題があるが、個々の子供が企業にアクセスして資料を取り寄せるとか、他にはリモートで会社の担当者と会話するとか、そういう個々のキャリアアップにつなげていけるのかと思う。そういうことは可能なのだろうか。是非、可能であれば、そのようなネット環境の整備を行えば、先ほど種村教育委員がおっしゃったように、全体の中では難しいが、個人であれば積極的にアプローチできる子供が出てくるかもしれないと考えるがどうか。

大山教育指導参事)

- ・技術的には可能。問題はそこまでに持っていくプロセスであり、何も知らない子供にいきなり、「はい、どうぞ」といきなりパソコンを渡すことにはならないので、これからの話となるが、小学校からどんな指導がされ、中学校からどういう指導がされていくかを把握して、中学校3年生のときに自分で調べて、企業へアプローチができる子供を育てていくということが出来ればという条件がつけば可能。
- ・今の職業体験は、1日で長くても2日であって、この1日2日を本当に職業体験と言ってよいものなのかというのも課題。中学校の3年間をどうキャリア教育でもっていくかということも課題になっていくと思うので、あわせて考えていきたい。

山口教育委員)

- ・ネット環境が整備されるという前提での全体計画の見直しということも今後必要。

蝦名市長)

- ・さきほど、種村教育委員からオンラインの授業の満足度が高いとのお話があったが、これは何か事例があるか。

種村教育委員)

- ・私自身、オンライン授業をリモートでやってみたところ、うちの塾であんまり普段しゃべらないような子が質問してきて、何か雰囲気はいつもと違うな、というように感じた。
- ・他の子が沢山いると質問してこないとかがあるのでは。また、A4版のタブレット画面を見ながら授業

したが、すごく集中していたので、普通ではこういうことはあまり見られない。画面を通して授業する一つの特徴。

岡部教育長)

- ・確かにパソコン一人一台体制は出来る。ただし、どうやって対面授業とオンライン授業を組み合わせた中で、より深い学びに誘導していくかが今後の課題に急になってきたと感じている。

種村教育委員)

- ・オンライン授業をどうしてもやらなければならない状況の中でやったが、集団授業に戻った時に改めて集団授業の良さがわかった。
- ・やっぱり生徒の顔を見て授業が出来ることが大きい。オンライン授業だと顔が見えなかったりするのので、そうすると生徒が理解しているのか、していないのかがわからない。ここはうまく組み合わせてやる必要。

蝦名市長)

- ・そういう意見をもっと表に出していきたい。教育の現場の中でどういう状況なのか、関心を高めていくということが必要。やってみて初めて分かることもある。そういうことをどうやって分かり易いように情報を出していけるものなのか。何か良い方法はないか。

山口教育委員)

- ・私立の塾での実践もあるし、北海道教育大学釧路附属中学校の実践事例もある。市立の学校ではリモート授業はやっていないが、既に取り組んでいる学校に出向いて色々な情報をもらい、我々の具体的なところに取り組んでいくとか。

大山教育指導参事)

- ・附属中学校へは実際に出向いて話も聞いている。ただし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によるオンラインでしか授業が出来ないという状況は想定されていない。日常の授業の中でどう使っていくかということと、オンラインの可能性というのはもう一つの側面があり、不登校の子供たちが家庭で学習できるということ、特殊学校において集団学習が不適應な子供は普通学級と同じ授業を隣の教室で画面を見ながら受けられるということも、今、試行的に行っている学校もあるので、情報等を押さえていく。

山口教育委員)

- ・集団不適應の子供が隣の教室で授業をうけるというのは、釧路市内の義務教育の学校で試行的に行っているのか。

大山教育指導参事)

- ・これは実際に集団不適應の子がやっていたという事例がある。しかし、これは道教委として授業数としてカウントしてよいのかというところが課題になっている。

山口教育委員)

- ・子供たちにとってどうなのかということが大切だけれど、判断できていないという状況か。

岡部教育長)

- ・文部科学省がオンラインを授業として認めてよいのかというところで判断できておらず、国の発想が昔のものに縛られている状況。恐らく法改正するかと思う。

種村教育委員)

- ・著作権というところでも二の足を踏んでいるのか。

岡部教育長)

- ・私塾は別ですが、今年度、学校教育については特例的に著作権料を無償ということで取り扱う規定ができたところ。

蝦名市長)

- ・やはり情報発信を行って関心を高めていくということが重要で、進めている途中でも情報をだしつつ検討していくという形が良い。

(2) 「成長の段階に応じた切れ目のない教育の推進」に係る意見総括

岡本総合政策部長)

- ・議題2は、これまでご意見をいただいた議題1にも関連するところで、「成長の段階に応じた切れ目のない教育」について意見総括。
- ・資料2「成長の段階に応じた切れ目のない教育を推進するためのロードマップ」についてご説明させていただく。
- ・平成30年度におきましては、保育園、幼稚園、小中学校、地域等の代表の方々と、「幼児期から義務教育へのつなぎ等にかかる課題の把握」というテーマにおいて、意見交換をしていただいた。そのご意見をもとに、前回の総合教育会議にて、家庭教育の重要性や児童館の活用等の議論をしていただき、一部児童館の活用については試行が始まっている。
- ・また、議題1にて、義務教育から高校、高等教育機関、就職へのご意見等をいただいたことにより、幼稚園・保育園・小学校・中学校・高校・高等教育機関・就職と、教育における全段階の議論をしたところ。
- ・総括ということで、この資料2のロードマップをベースに、全体を通して感じられたことや、これからもっと深めた議論をすべき点等をご発言いただければと思う。

山口教育委員)

- ・文部科学省で普通科高校を3つほどに細分化するという話がある。これはいつ頃具体化するか。なぜなら、学校教育部教育支援課でまとめている個人の小学校から中学校までのキャリアノートを作って、継続性のある将来の職業選択に結び付くような教育が必要であれば、中学校でやっていた進路指導というものが、今まで内申点の点数に基づく高校選択というような安易なことができなくなる。将来を見通した高校選択、普通科の中でもどういうコースを取るか、というものが必要になってくる。小学校は小学校、中学校は中学校、高校は高校という分断されたような指導というのは許されないのではないか。やはり、一貫性のある生き方指導という意味でのキャリア教育、これが今後ますます重要になるのでは。

岡部教育長)

- ・文部科学省や道教育委員会からも正式なものはないが、やはり、高等学校の普通科の存在が、「今、特段なりたいものがないので、とりあえず普通科」という普通科が相当多かった中での今回の細分化案だと受け止めており、前段の中学校等におけるキャリア教育を通して、少し将来の見据え方の時期を早める体制になると思う。ここについては情報が来たら、総合教育会議或いは教育委員会の中で議論をさせていただく。

種村教育委員)

- ・昨年、中学校の教科書が変わって、英語だけ絞って見てみるとかなり難しい。例えば、中学校3年生では、今の高校1年生が習っている分野を習うとか、中学校2年生が中学校3年生の内容を習うとか、中1は中2の内容を学ぶこととなっている。小学校は、以前に中学校1年でやっているような文型を学んだりする。つまり、小学校、中学校、高校の勉強の面での連携をして、どのような英語教育を進めていくかを常にそれぞれが考えていくことが必要では。
- ・今までは小学校の英語というのは、あまり重要視されてこなかった。今回はそうはならないし、ますます連携というのが必要と考える。

大山教育指導参事)

- ・ご指摘のとおり、英語が5、6年生の教科となったことから、英語を教える先生の力量が問われていく中で、実際には小学校の先生は英語の免許を持っていないという問題があり、誰が指導するかで大きな差が生じる可能性があるため、教育支援課としては2年前から英語について、小学校、中学校の先生を集めて英語教育についての研修講座を持って取り組んでいる。
- ・また、今年度に入ってから、英語の専科の先生の配置があるので、何校かには英語の専科の先生を配置して、小学校の高学年の英語の指導を行ってもらっている。しかし、これは十分ではないので、ご指摘のとおり、ここについては気を付けて見ていく必要がある。

種村教育委員)

- ・中学校1年生の教科書に文法が記載されていない。小学校である程度、文法がわかるようになっている気がするが、それが前提とされていて、中学校の教科書が作りこまれていると思う。昔は、中学校1年生でしっかりとした基礎を固めるような教科書の作りであったが、今回から違い、バラバラになってしまっている。会話主体になっており、文法はあまり記載されていない。単語は小学校5、6年生で、昔の中学校1年生で学んでいた単語がほとんど出ている。中学校1年生でやっていたものが、小学校の5、6年生でやるという形になっている。つまり、小学校でいかにしっかり基礎をおさえるよう教えていくかが大事であって、そうなれば中学生になっても楽に学んでいけるはず。

大山教育指導参事)

- ・文部科学省の指導方針では、会話を中心の英語の授業に変えてきており、それは文法中心の英語では国際社会では通用しないという反省があって今の指導法に変わってきている。今の教科書はその流れの中で出来上がってきており、指導法自体が変わってくると考えている。しかし、大事なところは何かというところは押さえていかなければならないので、それについては各研修講座等で指導する。

蝦名市長)

- ・つまり、中学校の教科書を見ると文法部分がない。だから、その文法部分というのは、小学校5、6年生のところに移っているだろうという推測か。

大山教育指導参事)

- ・小学校では文法の基礎を教えるわけではない。

蝦名市長)

- ・つまりは文法の基礎はやらないということか。

種村教育委員)

- ・そういうことだと思う。しかし、文法をやらないと中学校に入ると結構厳しいと思うが。

大山教育指導参事)

- ・確かにそこは大変難しいところ。きっと、高校入試も大学入試も将来、テストそのものが変わっていくのだろうと推測している。ヒアリング、スピーキングに重点をかけてきたときに、そこには対応出来ていけるものだと考えている。

山口教育委員)

- ・小学校高学年では、より専門的な指導が必要ではないか、ということで、専科、つまりは免許を持った教員の配置の必要性が言われているが、これは英語に限らず、小学校高学年を教科担任制にしたほうが良いのではないか、という議論が一方ではある。英語だけではなく、そのこともあわせて考えていくべきと思うが、財政的な課題、人員配置もあることから難しいものか。

大山教育指導参事)

- ・この件に関する権限は、北海道教育委員会にあるので、釧路市として金を出してということにはならないが、ただ、道教委としては、小学校高学年の専科指導に重点を置いた過配の人員配置となっており、既に国語、体育、理科、そして先ほどお話しした英語が入っており、今後は増えていくと考えられる。

山口教育委員)

- ・特に小学校の先生で理科が苦手な先生がいままでも多かったが、小学校高学年の理科については、理科が得意な先生にクラスを持ってもらったほうが子供たちにも良いのではないか。今後の展開としては、そういうことも踏まえて動いていると考えてよろしいか。

大山教育指導参事)

- ・市や道教委の方針というよりは、文部科学省の方針である。

蝦名市長)

- ・切れ目のない教育ということで、幼稚園や保育園、勉強の進め方等、色々なご意見をいただいたところ。これらをどのような形でつないでいくかと考えたときに、理想形としては、全てをつないでいきたい、ということで、まずは関心を持つところが一番目。しかし、実際につないでいくための良い考えが中々出てこない中で、良い方法等があれば教えていただきたい。
- ・幼稚園、保育園については、どこのエリアの子供がどこに通っているかは、別に決まっているわけではないため、全く把握できない状況。職場の近くに通わせていることもあれば、出迎えサービスを広域でやっているため、それを利用する方もいる。次に小学生になったら、次は学区というものがある。このために、この間の連携というのが難しい。
- ・次に、中学校はとなると、小学校と中学校の連携は義務教育学校になっていくのかと考えている。
- ・そして、中学校と高校は、ここでまた中学校の学区と高校の場所は違う。

- ・この学びの段階の中で、各段階をどうつないでいけば良いのか。または、つなぎ易いところがあるのか。つなぐと言っても、これらの違いを認識して、切れ目のない教育をどこからどこまで、どこからスタートさせていくか。難しいところは考えながらも後に回して、切れ目のない教育という全体としての考えをどうすべきか。ここについて議論をしていかなければならないと考えている。

大山教育指導参事)

- ・昨年度から小中連携研修会というものは、小学校、中学校の全ての先生が集まって研修を行うという取り組みで、今年度はコロナ禍の影響によって一斉にはやっていないが、校区ごとに集まりをもって進めている。
- ・そこでは小中連携について、まずは、小学校と中学校でお互い何をやっているかを理解し合おうということで、例えば教科部会や生徒指導部会、特別支援部会等に分かれて、それぞれが今行っていることを話し合いながら理解を深め、共通でやれるものは何かというところまで、昨年度の段階では進んでいる。
- ・また、昨年はそれに付け加えて授業参観等を行っている。例えば、小学校区、中学校区でノーゲームデー、ノーメディアデーという、ゲームやスマホ、パソコンを使わない日を設定して、小中同時にほとんどの学校で実施されている。
- ・学習規律、机の上の教科書やノートで何を置いたら良いのか、家庭学習の仕方を含めて、これは小・中・高で連携している学校が出てきている。これは小学校2校に中学校1校という形でも行っているもので、今年度から小学校同士も連携を進め、昨年度より一歩進んで取り組みを行っている。

山口教育委員)

- ・校長先生に話を聞くと、小中合同の研修会を受けて行った具体的な取り組みとしては良かったという意見が多く出てきている。
- ・小中で合同のノーゲームデーを設定しようとしていて、具体的には、中学校で定期テストの1週間から2週間くらい前から携帯等見ないで、しっかり勉強する期間にしようとしている。家庭に小学生と中学生の子供がいたときに、上の子はゲームせずに下の子はゲームをしているという状況が良くないということで、中学校に倣って小学校でもノーゲームデーを設けよう、という取り組みも、合同研修会から発生したと聞いている。

蝦名市長)

- ・そういった連携の中で、さきほども話に出ていた専科のことについても何かが出てくるのだろうか、と思ったところ。次、幼児教育についてと学校をどうするかという話もあるのかと思う。出来るところが連携することによってこんな効果がある、というところを表に出していく、ということが必要で、今、阿寒湖畔地区でも進んでいる義務教育学校も重要であり、小学校と中学校とのギャップという問題等、色々な課題を見据えた中での今後どう取り組んでいくかということでの連携があると思う。
- ・小・小連携というところも研修会を行ったということであるが、今後、どう発展的に進めていくのか。
- ・小・中は知っている子供たちの学年が上がっていくということになると思う。
- ・そうすると、次、中学校、高校となるが、簡単に連携とはいかないかもしれないが、また、何かやり方を考えていかなければならない。
- ・やはり、義務教育学校が主軸となる形になっていくか。

大山教育指導参事)

- ・究極の姿は、例えば、美原中学校の生徒が、美原小学校の生徒の夏休みの学習を手伝いに行く、というような形か。
- ・子供たちが動き出すと、生徒会や児童会の交流が出来たりして、いじめの問題をどう捉えるか、スマホの活用もどう取り扱うか等、校区の中で、子供たちが子供たち同士で話し合うことが起きる、とい

うような可能性が広がってくる。

- ・さきほどの専科の話だと、中学校に英語の専科の先生を置いて校区内の小学校を周る、という取り組みを来年度以降に進めようと思っているので、中学校の先生が小学校を周るというシステムが出来るので、これは期待できるのでは。

山口教育委員)

- ・是非、それはやってほしい。それは、授業の部分で中学校の先生が、小学校に行ってみてあげるといことで、逆に、小学校の先生は中学校に行き、心のケアの点で出番が作られるのであれば良いと思う。

大山教育指導参事)

- ・そこまで進むとよい。
- ・義務教育学校になると、その先生たちが9年間子供たちを見ていける。でも、釧路の大きい学校は、先ほどの形で見なければと考えている。

山口教育委員)

- ・鳥取中学校の英語の先生が、鳥取小学校や昭和小学校に行き、英語の授業を1時間くらい教えるという実践例はある。

蝦名市長)

- ・それは一つの効果。

山口教育委員)

- ・まずは学校の校区ごとに、それぞれの実情に合わせて実践を始めたというところ。

大山教育指導参事)

- ・そのとおり。

山口教育委員)

- ・小池教育委員は保護者も関わって子供たちを支えていけるような形があったらいいのではないかと、且つ、地域の方々も、というお話しをされていた。コミュニティスクールを単独でやるのではなくて、音別小中学校のように小中合同でということと昨年度やった。阿寒湖小中も同じ。大楽毛小中もやっている。さらに、今年からはコロナ禍で動き出せてはいないが、鳥取小学校、昭和小学校、新陽小学校の生徒が進学する鳥取中学校を中心としてコミュニティスクールゾーンを構想して、地域全体で保護者も含めて子供たちを支えていこうとしていた。その中では校区に入っている商業高等学校もコミュニティスクールの枠の中に組み入れていこうとしている。これは最初に話していた、子供たちが釧路で生まれ育ったということに誇りを持って釧路のために何とかしよう、というものに繋がっていくのではないかと。

小出教育委員)

- ・コミュニティスクールを表明しているところは、保護者と地域が一体となって、子供たちを支えるために活動している。その一方で、差があるということも実感としてあり、まだまだ課題が多いと思う。保護者の中にはまだまだコミュニティスクールを理解していない方が多く、そこを保護者にどう理解して貰うかということが、これから釧路市でコミュニティスクールを広げていくときには大事になってくる。協力する意義と協力していただいている方々の努力、気持ちというものをどう保護者に理解していただくかが、成功するかどうかの鍵。まだまだ自分も取り組んでいかなければと思

ますが、本当にそれが出来れば、共栄小学校とその地域の方々が一体に活動しているように良い形になっていくと思うし、子供たちのためにやってもらうと地域のために何か恩返しをしたいという保護者の気持ちにもなるという、そういう相乗効果も出る。

(3) 学校間連携の在り方について

岡本総合政策部長)

- ・ 議題2の切れ目のない教育というところから、小中学校の教科の話から、市長より校区についてのお話があり、そしてコミュニティーという展開となった。議題3については、コミュニティスクールを意識しており、非常に自然に話が進んだと思う。議題3も意識した中で、ご意見をいただければと思う。

松尾教育委員)

- ・ 先ほど、小出委員がおっしゃったような地域の方々との繋がりというのは大事。自分は地域の人間として、色々な活動を展開しているが、その中で感じたのは、まずは無関心な方々が多いこと。町内会に加入していない人が多いので、そういう中で取り組みが伝わっていかないという状況。回覧板にしても、町内会に入っていない人には届かないわけで、明日からラジオ体操があるといっても、やっているかも知らないこととなる。町内会に加入せよとは言えないが、加入活動しても断られる。その理由も町内会が何をやっているのかわからない、というもので、取り組みについて説明しても関心がなさ過ぎて、全然話ののってきえてくれない状況。ラジオ体操や盆踊りをやっていますと言ってもなかなか話にのらない。本当に町内会の活動として辛いと感じている。
- ・ 最近では地域の繋がりというのがすごく希薄すぎて、昔の話ばかりするのも嫌だが、子供同士の縦の繋がりで遊ぶことがあった時代というのも懐かしく思う。そのときは親も一緒になって他所の子供を怒っていたし、そういう地域の絆、人間の絆というのをどうやって作っていったら良いのか。
- ・ あまり良い例えではないが、大きな震災にあった後、すごいコミュニティーの力というものが生まれている。そういうことにはなりたくないですが、それくらい地域の人たちの絆が大事なんだ、この地域で育っているのだということを実感させられるような活動を大人がやっていかなければと思います。
- ・ さきほどご紹介がありました商業労政課と北陽高校の取り組みについても、市立も道立も取っ払って、もっと色々な人が入っていけないのかな、と思いました。商業高校でやっていたことに対して、OBやOGだけじゃなくて、他の学校の子も参加できないのかなど。あまり大きくなってしまうと大変かもしれませんが、例えば東高校の就職したい生徒が出たいと思ったら参加できるのか。それは学校間の連携もありますが、皆にそういう場を提供してもよいのではないかと思います。
- ・ 学校間の連携というところでは、小中とか幼保小とか様々な取り組みをやっていると思うのですが、学校のほうではなくて、子供たちがどう受け取るかということをもう少し考えてほしいと思います。
- ・ 小学校から中学校に子供たちが感じる不安というものをどう感じているのでしょうか。さきほどの高校生の就職のお話しですが、就職することへの不安というものをどう取り払っていけば良いのかということを考えてもらえればと思います。

岡本総合政策部長)

- ・ さきほどご紹介しました企業人での特別講座ですが、学校のOB、OGというところでの属性で入っていったというところですが、今後これらは検討の余地は。

熊谷産業振興部次長（商業労政課長）

- ・色々な高校から色々な人が入ってくるというのはよいが、まず、産業振興部としては、人口減少社会に対応するためにも少しでも地元就職してほしいと、そのための職業観の醸成だと考えており、2～3年就職して経った方々、OB、OGというその方々の言葉がとても響くもので、自分達より1～2年先輩の言葉をいただく、ひときわそういった先輩からの言葉というのは、未来への職業観、釧路で働くことの良さ、を感じてもらおうというところを狙ったものであり、その点についてはご理解いただきたい。
- ・それから、そういうような北陽高校、商業高校の他にもそういった高校を増やしていきたい。

松尾教育委員）

- ・すべての高校がやるのではなくて、ニーズ的にもそんなに沢山ないと思う。例えば、進学校である湖陵高校では就職する生徒が何人いるのかということも重要。けれど、就職する生徒もいるかもしれない。そういう子たちも参加できるような場があったらいいと思う。

岡本総合政策部長）

- ・あと、町内会を含めたコミュニティーへの意識のギャップというところをどうしていくのか、というところもあり、これは行政としてもこれから取り組まなければならない。
- ・議論が進みまして、議題3まで進んでおります。議題2と議題3は密接な話であって、不可分のところもあるかと思うが、学校間の連携の在り方がさらに重要だと感じたところ。

蝦名市長）

- ・現状としてはどういう形になっているのか。それぞれの小学校、中学校、さらには商業高校も入っていると聞いていたが、それがまとまった資料というものはあるものか。コミュニティスクールでの違う取り組みをやっている、濃淡の現状がわかるものは。

大山教育指導参事）

- ・それぞれの校区の特色で動いているもの。今年度、校区ごとに、ある程度リーダーシップがとれる校長が配置されているので、その校長が中心になりながら動いているという形。例えば、鳥取西中学校校区でいけば、小学校と中学校が連携して不登校の対応をどうするべきか、という話に特化していたり、学力の話をしていたりする。それが、各校区の特色にあわせた形で進んでいる形であることから、濃淡というよりは色々なカラーが出来ているのかなと考えている。その中身については、私が訪問して指導を進めている。

蝦名市長）

- ・特色がありながら進んでいる中で、あとはどう連携を進めていくか。切れ目のない教育ということで、全体で目指しながら、出来るところから途中途中でつなげていくということで進めている。もちろん、校区の中で課題解決のために進めていくのは良いが、まず、小学校、中学校をつなげていくかというところで、次、どう進めるか。出来るところでいけば、小学校と中学校、そしてコミュニティスクールという形の中で地域の力をお借りして進めていくという話を聞きき、結構、取り組みの効果があるのだなと感じた。意見交換会では連合庁内会に参加していただいて、地区連や児童館等でご協力いただいたりしており、学校だけ、先生だけという連携ではなくて、何とかもっと地域の力を活かしてというところで何か出来ていけないかと考えている。

山口教育委員）

- ・もちろん共通の課題もあるが、地域ごとに抱えている課題があるので、そのブロックごとに自分達の

課題については、リーダーシップをとれる校長が中心に取り組んでいる、ということで、同じ基準で濃淡があるわけではないということか。

大山教育指導参事)

- ・教育委員会として、コミュニティスクールを進めていくのであれば、例えば、全ての学校がコミュニティスクールになるような指定をすとか。私たちも学校のニーズに応じて、調整しながらそれをどう支援できるかを考えているので、今後も進めていきたい。

山口教育委員)

- ・学校間連携と幼・保・小の連携というところがある中で、子供たちにとっての釧路市の課題は学力を身に着けさせること。そのためには先生方のスキルアップを図る必要。初任者が色々な学校に配置されるが、配置先に素晴らしい授業をやる先生がいれば、百聞は一見に如かずで、若い先生は素晴らしい授業を見られる機会というのはすごく重要。指導室や校長先生のネットワークを使えば、釧路市内には素晴らしい先生は必ずるので、そういう授業を見て学ぶ、機会を意図的に作ってやればと思うし、それが横の連携に繋がると思うが。

大山教育指導参事)

- ・ご指摘のとおり、初任者の指導については色々と工夫していかないとならない時代。今、初任者の数が多くなっているが、昔のようにすぐ授業できる者が多いかということそうでもない現状。各学校でも苦勞しながら初任者研修に行うので、教育委員会としても様々な支援の方法があると思う。初任者は4年間という期間になりますので、どういう風に係っていけるか検討していきたい。
- ・ただ、4年間経た後に、市から町村に出て行ってしまう。その後は、7年は戻ってこず、もし町村を2校周ると戻ってくるときには40歳を超えていることになり、そこが問題。町村で初任者4年間を過ごした先生はそれから市に入っているの、そこから指導し直さないとな人数学級の市内の子供たちへ指導が出来ないという課題もあり、校長先生達の大変なところはそういう両方の場合があって、その中で指導していかなければならない。教育委員会としては、状況をしっかり把握して指導にあたりたいと考えている。

岡部教育長)

- ・冒頭にも述べたが、その部分については、オンラインを有効に活用することでクリアされていく面もあると思う。授業の上手な先生の実際の映像をリアルタイムで色々な学校の先生に見てもらおうということをオンライン活用してうまくやっていくことを考えている。

山口教育委員)

- ・秋田県大館市に行って学ぶという機会があったが、オンラインを活用すると向こうの素晴らしい授業をこちらに送ってもらって学ぶということも考えていける。

岡部教育長)

- ・実は、大館市がこのコロナ禍であってもなお、10月に来ても良いと言ってくれているので、今後のオンラインも含めた交流というようなところもあわせて行ってこようかと思う。

岡本総合政策部長)

- ・教員の方々の人材育成という観点で、世代更新というか、様々と変わってきている状況というのをお話しいただいた。
- ・本日の議題については、皆様の闊達に議論をいただいて、議題2、3において、全体としては総括ということで、また、各論的などころではコミュニティスクール制度を活用した小学校、中学校の連

携というところで各方面からのご意見をいただいた。行政側も各関係部長がお話しを聞いておりましたので、ご意見を活かしてまいりたい。

- ・議事につきましては、以上で終了とさせていただきたい。

4. その他

岡本総合政策部長)

- ・「4. その他」で、全体を通しまして皆様からご意見等ありましたら、こことでお受けしたいと思う。

松尾教育委員)

- ・昨年度の総合教育会議にて話となった児童館での学習支援、学力向上について、児童館の中で勉強させようということになり、自分が行っている緑ヶ岡児童館がモデルケースとして試行した報告をした。
- ・児童館側との日程調整が難しかったが、昨年10月から本年2月まで、毎月1回実施した。3月は新型コロナウイルス感染症の関係で実施できなかった。
- ・日程の調整については、児童館に子供たちが通ってくる時間としてクラブ活動の開始が遅い日等を考慮して日程の調整をしてもらい、午後3時から行ったところ。ただ、子供たちがなかなか来ないこともあって、始め45分で設定していたが、長くやっている子で1時間半やっていた。
- ・ボランティアとして母親クラブの会員等が5～6名くらい来ていて、子供たちの数は30～40名の間で勉強していた。
- ・教えることは出来ないが、低学年の子供たちが多いため、算数の掛け算や漢字の書き取りをさせて、ふざけている子供たちに集中させるとか、ここが間違っているんじゃないか、というような声かけをする感じで出来ていたため、子供たちも楽しんで勉強をしていた。
- ・問題は、保護者にこの取り組みが伝わっていないということ。お手紙には書いていただいているが、親が子供を迎えに来るタイミングで勉強をしていたりして、今、勉強していたところということを伝えたら、もっと遅くにくるんだったと言う親もいたところで、なかなか伝わっていないと感じた。
- ・子供たちが実際に勉強したものは、宿題であったり、家庭学習であったり、学校から出たプリントをやっていて、子供たちは子供たち同士でお話しをしながら楽しく勉強していた。
- ・コロナ禍でなければ、毎月1回必ず時間を設けて機会を増やしていきたいと考えていたところだが、残念ながら3月からは実施できてない状況。

蝦名市長)

- ・子供たちが30～40人参加とはすごい。

岡本総合政策部長)

- ・コロナ禍が終息後にはまた再開するのか。

松尾教育委員)

- ・再開したいと思っている。

岡本総合政策部長)

- ・ただいまお話しいただいたところで、課題が情報発信というところだったが、行政側ももっと周知していければと思う。

松尾教育委員)

- ・ただ、どこの児童館でも出来るかという、難しいものがある。

5. 閉会

岡本総合政策部長)

- ・それでは、以上をもって、令和2年度第1回釧路市総合教育会議を終了する。

(了)